

なり。麻生氏が加藤氏を歸京せしめ、赤松氏を足尾に止めざるもの皆此心にして犠牲を一身に負ふて他を免れしめんとせるに外ならず。此形勢を憂慮せるものに萱場保安課長あり。萱場氏は十三日泉屋旅館(萱場氏止宿)に訪問し來れる佐々木取締役と會見の際、熱心に妥協を勸説するところありたり。

かゝる情勢の中に、二個の運動起れり。其一は大塚足尾町長等の調停奔走なり。足尾町は事件勃發以來殆ど總ての商行爲杜絶し、所謂火の消えたる如き有様を呈し、花柳界の如き警察より歌舞彈絃を禁せられ暗雲の中にあり。町長の如き夙に事態の緩和に努むべき職責を有しながら、古河を憚りて何事も爲し得ず、足尾に於ける鑛業所長は最上席に位置す。町長之に次ぐと雖、總ての生活は銅山に依據するに非ざる限り何事をも爲し難き地なるため、町長として古河の好まざるを爲し得ざるは當然なりとす。十三日大塚足尾町長が鑛業所を訪ひ、十四日、神山郡會議員、倉澤宇都宮銀行足尾支店長と協議の結果、鑛業所の高木庶務課長の出席を求め提示したることは仲裁と云ふ域にだに達せず「鹹つた坑夫に此際いくらか手當を増して早く退散せしめたらどうです」と云ふ程度のものなりしが、高木課長は之を峻拒し「解雇手當を受取る坑夫既に二百名を超えたる今日如何とも爲す能はず」との答辯を以て、町長等は其儘引下かれり、第二の運動は足尾電燈社長鶴島保氏と有志野田勇太氏の運動なり。鶴島氏は足尾隨一の資産家、野田氏は資産上に最近失意の人なるが、兩氏とも金儲けには抜け目なき人と噂さる。此兩氏に對し「佐々木氏が兩人を使つてゐるな」と社會及組合側は之を見、佐々木氏は

「兎角うるさい男でね」と云ふ程の信用を拂ふのみなりしが如し、十三日朝野田氏は運動本部が野田氏舍弟の持家なるを名儀とし家主さんの資格にて麻生、高梨兩氏に來宅を求め、會社側と商議するの意あることを確め、次で佐々木氏に此意あることを報告し、且佐々木氏の所懐たる「第三者の調停を好まず出來得べくんば口うるさき足尾を去り佐々木麻生兩人個人として東京にて會見し此問題を研究したし」と云ふを十四日朝麻生氏に取り次ぎたり。麻生氏は成るべく足尾にて會見し度き希望なりしも、會社が強いて會見地を東京に選ぶとせば、上京も亦苦しからず、たゞ上京することを労働者一同にはかり、公開的研究をなすと共に、一方足尾には棚橋氏を留守隊長として止め、盛に氣勢を擧げ會見不調に終らば、即時來山運動を續くべしと云ふ意嚮にて上京を決心したるが、尙上京に就ては好ましからずとなす感情あり、決心の程を未だ返答せずして十四日午後棚橋氏を迎へたり。同氏が十三日夜より之を急がざるに到りしもの、蓋し一は精鍊の罷業開始されしと、一は萱場課長が事件解決のため動き出せるために、麻生氏のため稍有利に展開し來らんとする機微は、其間に捉へられたるなり。危機は十四日に到り漸く去らんとす。

▽精鍊部遂に罷業す

精鍊の罷業は坑夫側の氣勢遂日稍衰へんとするを盛り返せり。精鍊部は昨年八月機械夫の罷業を見